

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

Interactions between Verbs and Constructions  
in English: A Constructional View

(英語における動詞と構文の相互作用—構文論的観点)

氏 名

森藤 庄平

## 論 文 内 容 の 要 旨

動詞と構文の関係は、英語学・言語学における重要な課題の1つである。「形と意味」(form and meaning) に関する見方には、大別して動詞の意味が文の形を決定するという投射主義アプローチと、動詞の意味だけではなく構文の意味も文の形を決定するという構文主義アプローチとがある。前者は、Chomsky を代表とする生成文法の考えで、大きな単位の意味はそれを構成する下位単位の意味の組み合わせから決まるとする意味の合成性に基づく。それに対して、後者は、Fillmore, Goldberg 等を代表とする構文文法 (constructional grammar) の考えで、構文 (construction) を基本単位とみなし、それぞれの構文が固有の意味を持つとし、単純な合成性を否定する立場である。

本論文では、動詞の意味に帰することができない構文的意思 (constructional meaning) を認める構文主義アプローチのもとで、英語における動詞と構文の関係を探ることを目的とする。構文文法の観点からは、動詞の意味はどの構文内に現れても一定である。構文文法には次の2つの基本的な考えがある。1つ目は、構文を「形と意味の対応物 (form-meaning correspondence) とし、文だけではなく、句や語、さらには、形態素をも構文と見る点である。本論文でも、第6章の V *the hell out of* 構文や第7章の Body-Part off 構文のような動詞句も、第8章で見る *regrettably speaking* のような句も、構文と見做す。

2つ目は、複数の構文は互いに関連づけられた密接なネットワークを形成し、カテゴリー化関係によって接点がリンクされる形で継承関係によって結び付けられているということである。本論文では、全般に渡りこの2つの基本的な考えに基づき、動詞と構文との相互作用を通じて構文が成立するプロセスがいかなるものかを解明した。

第1章は、本論文の目的と構成を述べた。

第2章では、結果構文が動詞の意味ではなく、構文によって認可されることを示した。特に、動詞に認可されない結果構文で生じる動詞直後の名詞句 (直接目的語) に焦点を当てて詳しく論じた。結果構文に課せられる直接目的語制約 (結果句は深層の統語構造で直接目的語と叙述関係を成さなければならないという制約) は、非対格仮説も絡んで統語的に定義されている。しかし、こうした純粋に統語的な定義には問題があり、また、純粋に意味的に定義しても問題があることを指摘し、構文的に

再定義する必要があることを示した。本論文全般で使用する構文文法の基礎概念のいくつかを、結果構文の分析を通して紹介した。本論文全般に渡って、特に重要な構文理論の概念は、構文、制約 (constraint)、対応規則 (rules of correspondence)、構文間のリンク、プロトタイプ性 (prototypicality)、概念構造 (conceptual structure)、意味強制 (coercion)、経路形成 (path-formation)、アスペクト (aspect)、イディオム性 (idiomaticity)、構文イディオム (constructional idiom)、文法化 (grammaticalization)、標識 (marker) などである。

第3章では、移動動詞と着点句の概念構造上の相互作用を探ることで、Goldberg (1995) に従い、移動使役構文と結果構文の両者はメタファー的拡張リンクによって結び付けられることを示した。つまり、結果構文の結果句がメタファー的な着点であると見做せることから、結果構文を一種の移動構文と捉えることができるからである。さらに、継承関係において上位に位置し、これら2つの構文の特性を共有するより抽象的な構文である「動詞+着点句」構文の存在を主張した。

第4章では、移動構文および移動使役構文では方向句が、結果構文で結果句が、着点句として機能し、なかでも、into 句が着点句の典型となることを示した。「動詞+着点句」構文のプロトタイプとなる「動詞+into 句」構文を認め、into 句がこの構文で果たす機能について探った。動詞と into 句の相互作用から得られる達成には2種類あり、主に動詞の意味から得られる語彙的達成と、into 句が義務的に顕在化することで引き起こされる統語的達成があることを提案した。前者の場合、into 句に相当する意味が動詞の内在的意味として存在しているため、into 句を形の上で義務的に顕在化する必要がないが、後者の場合、into 句は構文によって認可され、構文の標識として機能するため義務的に顕在化しなくてはならないことを示した。

第5章では、He pushed open the door/He pushed the door open は、不変化詞構文ではなく結果構文の特殊例 Push Open 構文と分析できることを、構文理論の観点から示した。また、Push Open 構文は push 型動詞が表わす推進移動をプロトタイプとする概念構造を持つことを、動詞 push が持つ語彙的使役性から示した。動詞の内在的意味として語彙的使役の特性をすでに持つ break 型動詞に対して、push 型動詞の場合は、Push Open 構文の力を借りて語彙的使役の特性を持つことを示した。push 型動詞の場合は、とりわけ、階層構造化された概念構造に課せられる推論規則によって、使役性が生じることを示した。

第6章では、I {beat/kicked/annoyed/punched/surprised/irritated} the hell out of him を例とする V the hell out of 構文について論じた。とりわけ、この構文に生起する the hell out of の機能について、構文理論の観点から考察した。前章で存在を確認した Push Open 構文は、push が表わす推進移動を概念構造に表す。これに対して、この構文は pull が意味する分離移動を概念構造に表す構文である。この構文で使用可能な動詞は、the hell out of と共起することにより、動詞自体からではなく、V the hell out of 構文から、分離移動の概念構造を得る。the hell out of がこの構文の概念構造を統語構造に対応させる機能を担っていることを示した。

第7章では、Terry {yelled/wrote/programmed} her head off や Pat {sang/drank/sewed} his heart out を例とする Body-Part off 構文は、[V X's head off] という型の動詞句構文イディオムであることを示した。従来、この構文は結果構文の1例として分析されてきたが、本章では結果構文とは異なる独立した構文であることを、アスペクトとイディオム性の観点から主張した。Body-Part 名詞句と不

変化詞 *off* について、詳しく構文理論の観点から考察することによって、**Body-Part off** 構文の特性を明らかにした。また、この構文が「除去」を含意する動詞に基づく構文ではないことも示した。この章では、**Body-Part off** 構文を結果構文とは異なる、独自の形と独自の意味との対からなる独立した1つの構文として認める必要があることを明らかにした。

第8章では、スタイル離接詞としての挿入節 *I regret to say* と *regrettably speaking* について論じた。*I regret to say* の *to say* と *regrettably speaking* の *speaking* に注目し、両者は発話態度を表すモダリティ表現であり、機能的に平行な関係が見られると主張した。その根拠として、第一に、*to say* と *speaking* の両方が義務的であることを示した。すなわち、*regret* と *regrettably* が、語彙的に発話様態を限定する意味を含意しない場合には、*to say* と *speaking* がスタイル離接詞としての読みを、「意味強制」するがゆえに、*to say* と *speaking* が義務的となる。第二に、イディオム性の観点から、*to say* と *speaking* は、それぞれ *I regret to say* 、 *regrettably speaking* という構文イディオムをマークする標識としての機能を果たしていることを示した。第三に、*to say* と *speaking* は、形と意味のミスマッチを補填する機能を持つことを示した。

第9章は結論である。

本論文では、構文主義アプローチから動詞と構文との相互作用によって、構文が成立することを示した。最初に述べた構文文法の2つの基本的な考えから、本論文の構成を再度述べると次のようになる。

構文とは「形と意味の対応物」(*form-meaning correspondence*) であるという考えにより、構文は形と意味を対応させる規則とみることができる。各章で様々な構文を見たが、これら構文に共通する重要な機能とは、形と意味のミスマッチを補填する機能である。

本論文で扱ったどの構文も、形式と意味のミスマッチが生じている。

結果構文では、[VP V NP AP/PP], ‘make NP become AP/PP, by V-ing’の対応が示すように、例えば *John painted the house green* は、*John made the house become green by painting* とパラフレーズできる。Push Open 構文では、結果構文同様に、*John pushed the door open* / *John pushed open the door* は、*John made the door become open by pushing* とパラフレーズできる。また、結果構文/移動構文/移動使役構文の特性を共有するこれらのより抽象的な「動詞+into 句」構文も、[VP V into NP], ‘go into NP, making V-ing <manner/means> as a result of motion’の対応が示すように、例えば *John walked into the park* は、*John go into the park, making walking as a result of motion* とパラフレーズできる。V *the hell out of* 構文も同様に、*It bores the hell out of me* は、*it drives me crazy with boredom* とパラフレーズできる。これら構文には、主節と従属節のミスマッチが観察される。**Body-Part off** 構文の場合は、**Body-Part** 名詞句の認可に関して形と意味にずれがあり、「NP *regret to say*」と「-ly *speaking*」の場合では、述語 *be regrettable* は本来意味的には、下位のモダリティ・命題態度の領域にあるが、この構文によって上位のモダリティ・発話態度の領域の意味に、意味強制される。

形と意味のミスマッチを解消するために、構文が統語部門と意味部門のインタフェースを透明にするように両者の対応を規則的にする側面もある。こうした対応の規則性を構文が担うには、意味部門に、生成能力を持たせ、構文が指定する統語の形に適合するように、意味部門自体が意味強制を行う

と考える。その際用いる手法の一つが、本論で提案した経路形成である。また、構文がその形と意味のミスマッチを解消するには、構文が存在することを示す標識が必要となる。Culicover and Jackendoff (2005: 35) が指摘した標識として、Body-Part off 構文の特別な形態素 *heart out* や結果構文で見られる動詞が認可できない *fake object* 等がある。が、本論文ではそれに加えて新たに「動詞+into 句」構文において義務的に顕在化する into 句と、*regrettably speaking* 構文において義務的に顕在化する *speaking* が、標識として機能することを主張した。

複数の構文は互いに関連づけられたネットワークを形成し、カテゴリー化関係によって、互いの構文がリンクされる形で継承関係が成り立つというもう 1 つの構文文法の基本的考えに関しては、各章で以下の点を主張した。第 3 章でメタファーリンクによって結果構文と移動使役構文が連結されることを示し、第 4 章では、結果構文/移動使役構文/移動構文はそれらの特性を共有するより抽象的な「動詞+into 句」構文にリンクされることを示し、第 5 章の *Push Open* 構文は結果構文の特殊例として連結され、第 6 章の *V the hell out of* 構文は、移動使役構文の *pull* 型概念構造をもつ一例とし、第 7 章の Body-Part off 構文はどの構文にも属さず独立した構文であることを示した。